

ヘブル人への手紙7章 「とこしえの祭司メルキゼデク」

1A アブラハムを祝福する祭司 1-10

1B 平和と義の王 1-3

2B 十分の一の献げもの 4-10

2A レビ族の祭司職に代わる祭司 11-19

1B 別の部族 11-14

2B 朽ちない、いのちの力 15-19

3A 主の誓いによる祭司 20-28

1B 変わらない祭司 20-25

2B 永遠に完全な御子 26-28

本文

ヘブル人への手紙 7 章です。ついに著者は、メルキゼデクについて語り始めます。彼のことを語る事が、私たちの信じる主イエス・キリストのお働きを知ることになります。午前礼拝の詩篇朗読で読んだ、110 篇が、キリストを預言する詩になっているからです。改めて、もう一度、読みましょう。

1 【主】は私の主に言われた。「あなたはわたしの右の座に着いていなさい。わたしがあなたの敵をあなたの足台とするまで。」2 【主】はあなたの力の杖をシオンから伸ばされる。「あなたの敵のただ中で治めよ」と。3 あなたの民はあなたの戦いの日に喜んで仕える。聖なる威光をまもって夜明け前から。あなたの若さは朝露のようだ。4 【主】は誓われた。思い直されることはない。「あなたはメルキゼデクの例に倣いとこしえに祭司である。」5 あなたの右におられる主は御怒りの日に王たちを打ち砕かれる。6 国々をさばき屍で満たし広い地を治める首領を打ち砕かれる。7 主は道の傍らで流れから水を飲まれる。こうしてその頭を高く上げられる。

1 節は、イエスご自身が、十字架にかけられる最後の週で、神殿の敷地で引用された箇所です。ダビデが、キリストを「私の主」と呼んでいます。キリストがダビデの子であれば、どうして主と呼んでいるのか？と、イエス様の方から彼らに問われました。だれも答えることができなかった、というところです。主が復活されて、天に昇られて、それで父なる神の右に着座しておられます。

そして、この着座しておられる方が、4 節で、「【主】は誓われた。思い直されることはない。「あなたはメルキゼデクの例に倣いとこしえに祭司である。」」と、神ご自身に宣言されているのです。ここが、著者が詳しく、説き明かしたいと願っているところです。祭司と言え、神殿礼拝で動物の犠牲を献げる奉仕をしている祭司たちであることは、ユダヤ人には当たり前のことです。日本人に分

かりやすく言えば、「お坊さんと言ったら、寺のことでしょ？」というぐらい、当たり前のことです。

この手紙を受け取っている時には、まだ神殿がエルサレムに建っていました。そして、イエスを信じて、ユダヤ人は神殿礼拝を続けて献げていました。そしてイエスがメシアであると告白すると、不信者から迫害を受けます。ちょうど、ヨハネの福音書で、イエスを告白したらユダヤ人たちから追い出された、癒された、生まれつきの盲人がいたように、ユダヤ人たちの中から追い出されてしまうのです。それを恐れて、イエスを告白するのはほどほどにして、自分たちの共同体の中で生きようと引き下がろうとしていました。神殿礼拝をこれまでのように続けていこうと考えました。

けれども、イエス様ご自身が預言されたように、神殿は破壊されます。そのことを著者も知っていました。そもそも、神殿の、祭司によるいけにえの制度は、キリストご自身を指し示すものであり、本体はキリストご自身にあるのです。だからここで、キリストは、レビ族の祭司たちによるいけにえの制度以上の方なのだと示さないといけないと思ったのです。

これから、メルキゼデクについての説き明かしを読みますが、決して、当時のユダヤ人のことであろうという他人事にはできません。私たちには、仏教の檀家制度があります。イエスを信じるということは、日本人の家庭にある、お墓のことや、仏教の法事に直面することになります。その仏教の中身を信じるか、どうか？ということではなく、仏教のしきたりによって、日本人の家族が一つにまとまっています。そんなことはない、と言われるかがあるかもしれません。いいえ、イエス様を告白していこうとするならば、いつもは意識していない家族意識が心で葛藤する人は、私の牧会経験からすると、八割ぐらいいます。

そこで、信仰告白をどこまで明確にできるのか？ということです。その時に知る必要があるのは、キリストが、いかに、すぐれた方であるのか？ということです。そして、教会というのが、あらゆる地上の共同体を超えた、この方に結ばれた集まりだということです。7章から、著者は、「とこしえ」という言葉を繰り返して使います。他のものは一時的であり、廃れるが、この方はとこしえの祭司であるということです。

1A アブラハムを祝福する祭司 1-10

1B 平和と義の王 1-3

¹ このメルキゼデクはサレムの王で、いと高き神の祭司でしたが、アブラハムが王たちを打ち破って帰るのを迎えて祝福しました。² アブラハムは彼に、すべての物の十分の一を分け与えました。彼の名は訳すと、まず「義の王」、次に「サレムの王」、すなわち「平和の王」です。

メルキゼデクについては、創世記 14 章に出てくる人物です。そして、詩篇 110 篇で、ダビデによって再び預言されているのみです。アブラハムがウルの地から、神に示されたカナン人の地に移

り住んだときに、彼の甥のロトもいっしょに付いて来ていました。そして、アブラハムもロトも、羊や牛を飼っていましたが、土地が狭くなり、雇っている牧者たちの間でいざこざが起こるようになりました。アブラハムはロトに、「別れて住もう。あなたが右に行くなら、私は左に行き、あなたが左なら私は右に。」と言いました。そして、ロトは、ヨルダンの低地全体を見下ろして、とてもよく潤っていたのを見て、そこを選びました。けれども、そこにはソドムという町があります。非常によこしまな人々が住んでおり、神を恐れて生きる者には適さないところでしたが、ロトはソドムの近くに天幕をはって、住み始めました。

しばらくして、ロトはソドムの中に住み始めました。その頃、王たちの間で戦争が起こりました。ソドムにも敵がやって来て、そこにいる人々や財産を奪い取っていきました。その時にロトとその財産も奪い取られたのです。アブラハムは、甥を愛する愛のゆえに、その敵を追跡して、打ち破りました。そして無事に、ロトとその財産、またロトの家の人々を取り戻すことができました。その時に、メルキゼデクが現われます。創世記 14 章 17 節から読みます。

14:17-20 アブラムが、ケドルラオメルと彼に味方する王たちを打ち破って戻って来たとき、ソドムの王は、シャベの谷すなわち王の谷まで、彼を迎えに出て来た。18 また、サレムの王メルキゼデクは、パンとぶどう酒を持って来た。彼はいと高き神の祭司であった。19 彼はアブラムを祝福して言った。「アブラムに祝福あれ。いと高き神、天と地を造られた方より。20 いと高き神に誉れあれ。あなたの敵をあなたの手に渡された方に。」アブラムはすべての物の十分の一を彼に与えた。

サレムは、「平和」の意味で、エルサレムのことです。彼は平和の王でした。「エルサレム」の意味は、「神の平和」です。この場所に神が現われ、この場所に神殿が建てられ、この場所に主が来られて、町の外で十字架につけられ、よみがえられました。この場所で聖霊が弟子たちに降り、この場所に主は再び戻って来てくださいます。ここは、神の平和が実現するための町です。このサレムを治めているのが、メルキゼデクでした。そして名前のメルキゼデクは、「義の王」という意味です。メレクが王、ツエデクが正義です。神の義によって平和をもたらす王であります。キリストご自身に似ていますね。そして、パンとぶどう酒を持って来ています。主が、弟子たちとともに聖餐を行なわれたことを思い起こさせますね。

そして、彼はいと高き神の祭司です。これは不思議なことであり、なぜなら、旧約聖書には、王であり、かつ祭司である人は、このメルキゼデク以外には出てこないからです。ダビデ、ソロモン、その後続く王はみな、王であっても、聖所で神に仕える人々はみな、アロンの子孫である祭司たちが行なっていました。けれども、メルキゼデクは、王であり、かつ祭司です。そして彼は、アブラハムに祝福を与えます。アブラハムは、「わたしは、あなたを祝福する」という神の約束を受けていましたが、メルキゼデクは、この神の祝福を与えています。そして、アブラハムはこの祭司に十分

の一のささげものをしました。

³ 父もなく、母もなく、系図もなく、生涯の初めもなく、いのちの終わりもなく、神の子に似た者とされて、いつまでも祭司としてとどまっているのです。

聖書には、系図が綿密に書かれています。創世記には、アダムの子セツの系図があり、セツの子孫にノアがいます。ノアには三人の息子がいましたが、その一人セムから、アブラハムがでてきました。アブラハムからイサク、ヤコブ、そして十二人の息子がでてきます。その一人レビから、モーセとアロンがでてきましたが、アロンの子たちが祭司職に着くようになりました。系図が存在しており、一人一人は、その父と母がおり、生涯の初めと終わりも記されています。

しかし、メルキゼデクには、こうした系図が何もありません。そして、生涯の初めもなく、いのちの終わりもない、ということは、永遠に生きている存在であるということです。そこで彼は、「神の子に似た者」と呼ばれています。まさに、この地上に属さず、天に属しておられる方、御子ご自身のような存在です。ゆえに、永遠に、とこしえに祭司としてとどまっています。

2B 十分の一の献げもの 4-10

⁴ さて、その人がどんなに偉大であったかを考えてみなさい。族長であるアブラハムでさえ、彼に一番良い戦利品の十分の一を与えました。

どれほど偉大かを「考えてみなさい」と言っています。ここがとても大切です。3章1節でも、「私たちが告白する、使徒であり大祭司であるイエスのことを考えなさい。」と言っていました。靈的に怠けて、漫然と眺めているだけで、よく考えていないという事が起こります。私たちは、思いめぐらして、じっと見つめて、それでこの方が、いかに偉大かが見えてくるのです。

アブラハムは、十分の一を与えましたが、それは最良の戦利品でした。ここ「一番良い」は、「積み上げられたものの一番上にあるもの」という意味です。戦利品が積み上げら得ていて、最も良いものは一番上にあります。それを献げました。そして、アブラハムがどんな存在かを考えましょう。「族長」です。一族を代表する者です。ですから、彼はその後に続く者たちをも代表しており、その者たちも共に、メルキゼデクに献げていると言っても過言ではありません。

⁵ レビの子らの中で祭司職を受ける者たちは、同じアブラハムの子孫であるのに、民から、すなわち自分の兄弟たちから、十分の一を徴収するように、律法で命じられています。⁶ ところが、レビの子らの系図につながない者が、アブラハムから十分の一を受け取り、約束を受けたアブラハムを祝福しました。

民数記 18 章 21-29 節までに、レビ人が、民から十分の一を受け取ることが明記されています。彼らは、神に仕える務めにあずかっているため、それに専念するために生活の糧をイスラエル人によって支えられます。ゆえに相続地の割り当てがありません。さらに、アロンの家の者たちは、そのレビ人たちから十分の一を受け取ります。つまり、イスラエルの人たちはレビ人に対して献げることによって、神ご自身に仕えているのです。ところが、メルキデゼクは、アロンの系図の者ではありません。それにも関わらず十分の一を受け取っています。

⁷ 言うまでもなく、より劣った者が、よりすぐれた者から祝福を受けるものです。

誰かが他の誰かを祝福するとき、それは祝福する者が上位にあり、祝福される者は下位にいます。つまり、メルキデゼクは、族長アブラハムよりも、さらにすぐれた方ということになります。

⁸ 十分の一を受けているのは、一方では、死ぬべき人たちですが、他方では、生きていと証しされている人です。

アロンとその子孫は、死んでいきました。けれども、メルキデゼクは、死なないで生きているとあかしされている、ということです。

⁹ 言うならば、十分の一を受け取るレビでさえ、アブラハムを通して十分の一を納めたのでした。¹⁰ というのは、メルキゼデクがアブラハムを出迎えたとき、レビはまだ父の腰の中にいたからです。

アブラハムは族長です。彼に連なる子孫をも代表して、十一を献げたとも言えます。レビ人は、十分の一を受け取っていたのですが、レビ自身もアブラハムの腰から出てきた者であり、彼らもまた、メルキゼデクに十一を献げていたとも言えるのです。

この不思議な、メルキゼデクという祭司が、イエス・キリストと同一なのかどうかについて意見が別れています。この祭司が、イエスご自身なのではないか？という意見があり、それは妥当な意見です。主は、旧約時代においても、主の使いと呼ばれ、現れていることがあります。例えば、イザヤ 6 章で、主の栄光の御座におられる姿を、ヨハネは、イザヤはイエスを見たと言っています（ヨハネ 12:41）。同じように、イエス様は、「8:56 あなたがたの父アブラハムは、わたしの日を見るようになることを、大いに喜んでいました。そして、それを見て、喜んだのです。」と言われました。この言葉を聞いていたユダヤ人たちは、アブラハムがイエスを見たと言った（57 節）。いつ、目と目を合わせて見たのか？このメルキゼデクによってではないか、とも解釈することができます。

このようにして、レビ人の他に、異なる祭司職があり、それがメルキゼデクの位であることが分かりました。そして、メルキゼデクの位のほうが、レビ人たちの位よりも上にあることが分かったので

す。これは、実に族長のアブラハムに祝福を与え、また十分の一を受け取るほどの、高い位にいるということなのです。

ところで、十分の一の献げものについてですが、これについて、教会の中で議論があります。これは、律法であり、私たちは律法の下にはいないのだから、無関係のことだとする立場。もう一つは、今も、ここへブル書にも書かれており、有効であり、私たちは守らなければいけないという立場です。私は、このどちらでもない聖書解釈の立場を取っています。それは、愛の律法に私たちは捕えられているということです。律法がなくなったのではなく、愛によって律法の神髄を行うことができるようになっているという立場です。

イエス様が、パリサイ人にこう言われました。「マタ 23:23 わざわいだ、偽善の律法学者、パリサイ人。おまえたちはミント、イノンド、クミンの十分の一を納めているが、律法の中ではるかに重要なもの、正義とあわれみと誠実をおろそかにしている。十分の一もおろそかにしてはいけないが、これこそしなければならないことだ。」十分の一をおろそかにしてはいけない、とイエス様は言われます。しかし、それにこだわって、香辛料の十分の一まで納めているが、律法の中では、はるかに重要なものがある。それは正義や憐れみ、誠実なのだということです。

十分の一を献金するというのは、神の与えられた良い基準です。私たちが安息日を厳守するわけではないけれども、安息して、主をあがめる日にするというのは、原則としてとても大切なと同じです。しかし、もっと大事なものは、キリストを愛する愛ゆえに、心から、喜んで献げることです。律法というのは、実は怠け心を隠す良い口実になります。「十分の一を献げていれば、これで神さまとの関係は安泰ですね。」というものです。しかし、私たちはキリストの愛に駆り立てられます。イエス様は、やもめの献金を、「だれもより多く投げ入れました。」と言われました(ルカ 21:3)。なぜかという、「ルカ 21:4 あの人たちはみな、あり余る中から献金として投げ入れたのに、この人は乏しい中から、持っていた生きる手立てのすべてを投げ入れたのですから。」ですから、十分の一と言わないで、もっと献げる自由があるということ。「II コリ 9:7 一人ひとり、いやいやながらでなく、強いられてでもなく、心で決めたとおりにしなさい。神は、喜んで与える人を愛してくださるのです。」

2A レビ族の祭司職に代わる祭司 11-19

そこで、レビ人の祭司職が変わりうるものであり、今は、メルキゼデクの位に倣うキリストが、私たちの祭司なのだということを説いていきます。

1B 別の部族 11-14

¹¹ 民はレビ族の祭司職に基づいて律法を与えられました。もしその祭司職によって完全さに到達できたのなら、それ以上何の必要があつて、アロンに倣ってではなく、メルキゼデクに倣ってと言われる、別の祭司が立てられたのでしょうか。¹² 祭司職が変われば、必ず律法も変わらなければな

りません。

祭司は、人のためにいけにえを献げて、神から罪の赦しをいただく務めです。これによって、人々が神に受け入れられた者となり、神に近づくことができ、神のいのちと恵みを受け取ることができます。けれども、冒頭でお話ししましたが、「完全」という言葉が 7 章から多く出てきます。レビ人の祭司職は、主にお仕えする人々を生み出し、そこからイスラエルの民が神の恵みといのちにあずかったのですが、完全ではなかったということです。完全とされていなかったからこそ、詩篇 110 篇で、律法が与えられてから 400 年経っているのに、新たな職位の祭司が宣言されました。

¹² 祭司職が変われば、必ず律法も変わらなければなりません。

新たな祭司職になっており、そこでレビ人の祭司職の基となっている律法も変わらないといけな
いといっています。律法と、キリストの福音の関係は、これから詳しく、著者がこの手紙の中で解き
明かしていきます。これまでもパウロの手紙で見えてきましたが、律法自体を否定するのではなく、
むしろ、それは正しく、良いもので、聖なるものです。

しかし、律法によって罪の赦しを得られるかというそうではない、完全ではないということです。
むしろ律法によって、罪深さがますます明らかになり、ただキリストのなされたことによってしか救
われられないのだということを教えるのです。そして、キリストが来られた今は、この方にそのまま信頼
して生きる道が与えられています。

¹³ 私たちがこれまで語ってきた方は、祭壇に仕える者が出たことのない、別の部族に属しておられ
ます。¹⁴ 私たちの主がユダ族から出られたことは明らかですが、この部族について、モーセは祭司
に関する何を述べていないのです。

主イエスは、「ユダの獅子」と呼ばれました(黙示 5 章)。それは、ユダ族からダビデが出てきて、
ダビデの世継ぎの子が、イエス・キリストだからです。ユダに対して父ヤコブが、「創 49:10 王権は
ユダを離れず、王笏はその足の間を離れない。ついには彼がシロに来て、諸国の民は彼に従う。」
と言いましたが、ユダ族には王が出てくることが約束されています。

けれどもモーセは、この部族については祭司について何も話しませんでした。むしろ、王たちが
祭司の務めに触れることは、神への冒瀆とみなされました。聖別されているのは、アロンの家系の
者たちだけだからです。そのまねごとをした、王サウルは神に退けられました。ウリヤ王は、神を
愛して、人々にも尊敬されていましたが、晩年に神殿の中に入ってしまったので、らい病(ツアラアト)
にかかってしまいました。

けれども詩篇 110 篇は、明確に、キリストが神の右の座に着くという約束があります。そして、その同じキリストが、メルキゼデクの位に倣う、とこしえの祭司であるとの預言があるのです。

2B 朽ちない、いのちの力 15-19

¹⁵ もしメルキゼデクと同じような、別の祭司が立つなら、以上のことはますます明らかになります。

¹⁶ その祭司は、肉についての戒めである律法にはよらず、朽ちることのない、いのちの力によって祭司となったのです。¹⁷ この方について、こう証しされています。「あなたは、メルキゼデクの例に倣い、とこしえに祭司である。」

レビ人の祭司職と、メルキゼデクの祭司との決定的な違いは、前者が「肉についての戒め」であるのに対して、後者は「朽ちることのない、いのちの力」に属することであることです。地上のものであるか、天からのものであるか、肉に属するものであるか、それとも御霊に属するものであるかの違いです。

これからヘブル書の著者は、旧約時代における神の。罪を赦す贖いの制度と、新約における完成を詳しく話していきます。アダムが罪を犯して、神は贖いの業を始められました。アダムとエバの着物のために、動物をほふって衣を与えられたところから始まりましたが、それは完全なもの、私たちの罪を完全に、永遠の取り除くための準備期間でした。その完全な者が来る前に、その完全なものを指し示し、かつ完全なものに導くものとして、律法が存在し、祭司制度が存在していました。その中に生きることによって、究極の贖罪、キリストにある贖罪が先にあることを信じることができ、自分たちの罪が完全に洗い清められる日を待ち望むことができるようにしてくださったのです。

そして今、完全なものが現れました。キリストご自身であり、この方が祭司として私たちのための罪の清めを成し遂げ、神の右の座で執り成しておられるのです。ですから、その不完全な制度に頼ることはおかしいことであり、逆戻りに他ならないのです。そうしたら、完全なものを完全ではないように否むことであり、救いをないがしろにしていることになります。

肉についての戒めとは、目に見える形で清めを行ったりすることです。しかし、そこには効力がないわけです。しかし、キリストが祭司であるならば、この方には、朽ちることのない、いのちの力があります。主ご自身が、死んでいたのによみがえられました。そして、無尽蔵に、どんな時にも、いのちが注がれます。天からの恵みとして、私たちに、神と自分とを結ぶ仲介の働きをしてくださっているのです。

¹⁸ 一方で、前の戒めは、弱く無益なために廃止され、¹⁹—律法は何も全うしなかったのです—もう一方では、もっとすぐれた希望が導き入れられました。これによって私たちは神に近づくのです。

律法が無益というのは、どういうことでしょうか？それは、天におられる父なる神に近づくことです。律法は、聖なるものであり、正しく、良いものです。しかし、そのことによって人々が神に近づくかという、そうではなく、むしろ、神から遠く離れている罪人であることが明らかにされます。そういった意味で、律法は何も全うしませんでした。人を神に近づくことに貢献しませんでした。

しかし、「もっとすぐれた希望が導き入れられました」と言っています。もっとすぐれた、という言い回し、ヘブル書では数多く出てきますね。律法を守り行うことによって、永遠のいのちを得るという希望は、それが自分の罪によってできないことで無益となりました。けれども、キリストが、その律法の要求を満たすために、十字架につけられました。この方の流された血潮によって、罪が取り除かれました。それで、この方によって神に大胆に近づくことができるようになったのです。これが、希望です。キリストの罪の清めの働きで、私たちは神に近づく希望が与えられたのです。

3A 主の誓いによる祭司 20-28

1B 変わらない祭司 20-25

²⁰また、神による誓いなしではありません。レビの子らの場合は、神による誓いなしに祭司となっていますが、²¹この方は、ご自分に対して言われた神の誓いによって祭司とされました。「主は誓われた。思い直されることはない。『あなたはとこしえに祭司である。』」

私たちは6章で、アブラハムに対して、誓いをもって神が約束を確かにされたことを学びました。ここ詩篇110篇でも同じで、主は誓って、キリストがとこしえに祭司となると言われたのです。しかし、レビの子らの場合は、その血筋によって、そのまま祭司となっていくます。アロンの家系の中で綿々と、大祭司の務めが受け継がれていきました。大祭司が死ねば、その息子たちの一人が大祭司となりました。そこには、神ご自身の誓いはありません。時には、イエス様が地上におられた時のように、その祭司職は腐敗していたこともあったのです。けれども、キリストの場合は違います。主の誓いによって、とこしえの祭司に任じられました。

²²その分、イエスは、もっとすぐれた契約の保証とされました。

この契約については、8章で詳しく著者は、説き明かします。律法が中心となっている古い契約ではなく、もっとすぐれた契約、新しい契約の保証となったということです。主の流された血が、新しい契約のしるしとなりました。

²³また、レビの子らの場合は、死ということがあるために、務めにいつまでもとどまることができず、大勢の者が祭司となっていますが、²⁴イエスは永遠に存在されるので、変わることはない祭司職を持っておられます。²⁵したがってイエスは、いつも生きていて、彼らのためにとりなしをしておられるので、ご自分によって神に近づく人々を完全に救うことができになります。

レビ人は、人間の肉体を持っています。だから、いつまでもその務めに留まることはできません。それで、大勢の人たちが大祭司となってきました。けれども、イエスは違います。私たちは、イエスは肉体を取られたことを学びましたが、しかし、この方はよみがえられました。そのことで、生きた神の御子であることを現しました。いつまでも、生きておられる方です。だから、祭司の務めも、いつまでも変わることがなく、行うことができるのです。

これは慰めですね。この方はいつも変わらないので、いつでも、私たちのために執り成してください。ご自身が流された血について、いつまでも、私たちの罪の赦しが御霊によってあてがわれています。それは、尽きることのない泉のように、私たちの魂と霊に流れてきます。だから、ご自分のよって神に近づく人々を、完全に救うことができるのです。

午前礼拝で学んだように、完全とは、とことんまでという意味もあります。どんなことがあっても、執り成してください、神の恵みと祝福が分かち合われています。どんな苦境にあっても、主は共におられます。そして罪をたとえ犯してしまっても、主は立ち直らせてくださいます。そして、最後まで救ってくださいます。終わりの日においても、主は子羊であられます。ご自身の血によって清めてくださり、癒してくださったことは、とこしえまでも、いつまで変わることなく、ずっと癒してくださり、清めてくださるのです。主の愛が、いつまでも尽きることなく注がれるのです。

2B 永遠に完全な御子 26-28

²⁶ このような方、敬虔で、悪も汚れもなく、罪人から離され、また天よりも高く上げられた大祭司こそ、私たちにとってまさに必要な方です。

イエスは、敬虔な方でした。神の律法を敬い、守られました。そして、「悪」がありません。悪意も悪行もありません。そして「汚れ」がありませんでした。道徳上の汚れがありませんでした。そして、「罪人から離れ」ています。主は、罪人の真ん中におられました。けれども、私たちのようではなかったのです。罪人に影響される方ではなく、罪人に影響を与える方です。

そして、「天よりも高く上げられた大祭司」であられます。天は複数あり、主はもろもろの天よりも高く上げられた方であり、神の右の座に着いておられる方です。その高いところから大祭司として、私たちに、完全な罪の清めを成し遂げてくださいました。この方こそ必要であると言っています。主は肉体を取られ、その弱さを身にまといました。けれども、罪から離れておられました。そして、天におられる方です。完全に人となられ、弱さを知っておられて、しかし、罪から離れ天の大祭司になっているがゆえに、神と人との架け橋になり、平和を造り出すことがおできになります。まさに、メルキゼデク、義の王であり、かつ平和の王にふさわしい祭司です。

²⁷ イエスは、ほかの大祭司たちのように、まず自分の罪のために、次に民の罪のために、毎日い

けにえを献げる必要はありません。イエスは自分自身を献げ、ただ一度でそのことを成し遂げられたからです。

覚えていますか、大祭司が宥めの日、あるいは大贖罪日において、イスラエルの民の罪の清めのために、至聖所に入ります。けれども、まず、自分自身の罪のためにいけにえを屠り、それからその血を携えて、宥めの蓋のところで振りかけます。それから初めて、イスラエルの罪のためにいけにえを屠り、再び至聖所に入って、血をふりかけるのです。この年に一度の宥めの他に、毎日、いけにえを携えていきます。その時も自分の罪の赦しのためのいけにえと、民のためのいけにえの両方を行います。

ここでの対比は、こうした「毎日のささげ物」に対する、「ただ一度の完成」です。イエス様は、動物のいけにえではなく、ご自身をいけにえにして、血を流してお献げになりました。そのいけにえこそが、神が完全に満足されたいけにえです。罪なき方がすべての人の罪のゆえに罪人とみなされた。これが、完全ないけにえでした。ゆえに、ただ一度で、罪の赦しを成し遂げられたのです。これが大きな違いです。ヘブル書で、これから「ただ一度」という言葉が出てきます。もう繰り返して、罪の赦しのための犠牲は必要なのです。

私たち、キリストを信じる者たちの奉仕と、他の宗教の人たちの神への奉仕の違いはここにあります。私たちは、すでに完成された救いの立っていて、その感謝の応答して、奉仕をします。けれども、他の宗教の人たち、例えばイスラム教の人たちは、善行を積んでいって、それで天国に行けるかもしれないとします。エホバの証人などの異端も同じです。自分たちの神への忠実さが、神の国に入れるか、入れないかを決めます。これから、完成するかもしれないという期待をもって、今の奉仕をするのです。しかし、私たちキリスト者は違います。すでに、神がキリストにあって完成してくださいました。そのことに応答して、神に感謝し、心から仕えるのです。

旧約時代の人たちも、そのことを願っていました。けれども、今まで見てきたとおり、不完全でした。神の贖いは完全であることを信じて、これらのいけにえを屠っていました。しかし、完全なものがまだ来ていなかったのも、その不完全な中で繰り返さなければいけなかったのです。

²⁸ 律法は、弱さを持つ人間たちを大祭司に立てますが、律法の後から来た誓いのみことばは、永遠に完全な者とされた御子を立てるのです。

律法においては、神を代表するための大祭司を立てましたが、あくまでも人間です。弱さを持っています。だから、人を代表して執り成すことができても、神ではないので、まだ、その間には隔ての壁があるのです。しかし、先ほど見た誓いの言葉、詩篇 110 篇の言葉は、第一に永遠です。人間の祭司は死にますが、主は死にません。第二に、完全です。人の祭司は自分自身の罪が

あり、その清めが必要ですが、主は罪から離れています。第三に、この方は神の御子であり、神ご自身なのです。

このようにして、創世記 14 章に出てきたメルキゼデク、詩篇 110 篇のキリストの預言は、地上で行われていた祭司の制度を超えて、その祭司の制度が求めていたことをすべて満足させる、天における祭司の務めを教えているのです。アブラハムに対して現れたメルキゼデクがいて、けれどもモーセの律法によって、アロンの家系による祭司制度が定められましたが、今や、メルキゼデクの例に倣って、キリストが大祭司として立てられています。だから、ユダヤ人の信者たちは、イエスの告白を捨てて、神殿での犠牲のいけにえに安住してはいけないのです。

最後に、私たち日本人の生活に当てはめてみたいと思います。日本の家族、もちろん尊いものです。家族や親戚づきあいは、従来から冠婚葬祭でつながっていました。特に、葬儀については仏教の慣習に則ったものであり、死んだ後も法事、また墓参りによって集まる機会があり、それで絆が深められてきました。そして昔は、村のお坊さんが何か共同体で大事なことがあったり、事件があれば、そこで介入して、仲介の働きもしていたことでしょう。

しかし今は、いかがでしょうか？ 仏教はビジネス化しています。そして人々は、集まらなければひんしゆくを買うという、否定的な動機で集まります。けれども、遺産相続の争いなど、醜いものがあります。私の母親は、疑問に思いました。自分の母、私にとってのお祖母さんが亡くなりました。お墓もあります。そこにお祖母さんがいるとして、お線香を焚きます。けれども、仏壇もあります。そこにもお祖母さんがいて、お線香をして、お供え物をします。でも、どちらにお祖母さんがいるのだろう？ と疑問に思ったそうです。愛する人を失って、その悲しみを悼むための葬儀であり、仏教のしきたりには初めは、何かいろいろな意味があったのですが、形骸化している中で、それを機械的に繰り返している部分があるのです。しかし、母はイエス・キリストを知りました。天の望みがあります。そして、自分の母、父のことは、神さまに任せています。

私は以前、そのことを聖書のメッセージの中で少しだけ言及しました。そうしたら、そのグループの人たちが、私に「謝れ、訂正してください。」と迫ってきました。そこに、お坊さんが親戚の中にいる未信者がいたからだ、ということです。キリスト者の集まりなのに、キリストへの告白によって集まっているはずなのに、それでも共同体の意識の中に縛られていたのです。これが、ユダヤ人の信者の中でも受けていた圧迫です。しきたりがあって、そのしきたりに共同体の論理があります。信仰を告白することは、その共同体から追い出されることにつながるのです。村八分ですね。

しかし、そこで思い出さなければいけないのは、キリストのすばらしさなのです。こうしたしきたりの中に、キリストを埋め込むことはできないのです。この方は、こうしたことのはるかに高いところにおられる方で、私たちは結ばれた者です。新しいぶどう酒に古い皮袋は入れられません。